

「2023年度中国・浙江大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学総合人間学部2年 北原 伶人

海外に行くという経験は、まさに人生で初めてであった。あらゆる体験が新鮮かつ刺激的で、実りある2週間だったと感じている。特に自分にとって印象的だった部分に焦点を当てつつ、それぞれの項目について書き記していこうと思う。

そもそもこの留学プログラムに応募するかどうかという点で、かなり迷った記憶がある。自分の語学力に自信がなかったうえ、海外経験がなかったことが原因だった。だが、それまでの人生で挑戦というものを避けてきた自覚はあったので、そんな自分を変えるきっかけになればと思い応募を決意した。結果として、この挑戦は非常に有意義なものであった。留学を通して小さな挫折は数回ほどあったが、最終的にそれを上回る充足感・達成感を得ることができたので、不安が多い中での挑戦というものについてある意味成功体験を作ることができた。

大学一回生のころから京大の長期交換留学プログラムに興味があったものの、一步踏み出せずにずるずると現在まで来てしまった。今回の短期留学で得た自信により、長期交換留学に挑戦してみようという気持ちがいつそう高まった。今回の留学を経て、想像していたよりも異国の人とコミュニケーションが取れる、という喜びがあった反面、語学力がもっと高かったらさらに深い関係を築くことができたのだろうという感触があった。語学力を高めてそれを人間関係で活かすということを大きな目的として、長期留学では英語もしくは中国語（あるいは両方）を主に使う文化圏に行きたいと感じた。

留学中、多くの人に助けってもらったし、親切にしてもらった。もちろん、もう少し自力でなんとかする力を身につけたいとも思ったが、自分一人の力で生きていくことは絶対に不可能であるという実感を得ることもできた。いままで人に頼ることは億劫になりがちだったが、そうした面が少し改善された気がする（良い意味で図々しさを手に入れたと言えるかもしれない）。自分が多くの親切をもらったことで、もし日本で困っている外国人の人がいたら、積極的に助けてあげようと思った。

授業は、他の長期留学生たちと同じクラスで受けた（逆に中国人の学生はいなかった）。そこで、さまざまな国の雰囲気を感じることができた。日本と比べて、授業が先生と生徒の双方で成り立っているという雰囲気があった。生徒のアウトプットの機会が多い、生徒が積極的に質問をする、グループワークが多い、そしてそれらに対して先生のフィードバックが充実しているという点が特徴的だった。

同じクラスで仲良くなった韓国人との会話は、ほぼすべて中国語だった。知っている単語や表現をフルに活用して、身振り手振りをしながら意思疎通を計った。母語以外の言語を使って異国の人とコミュニケーションをとることの楽しさ、喜びを実感することができたと同時に、語学力を高めたいというモチベーションを得ることができた。

共同セミナーでは、自分たちで準備した発表をしたあとに、ディスカッションの時間があった。ディスカッションは英語だったが、個人的にほとんど中身のあるディスカッションをすることができなかった。日常会話で求められる英語力と、議論の際に求められる英語力にはそれなりに壁があることを知り、自分の実力を再認識することになった。それに加え、そもそも自分の意見を言うことの難しさを痛感した。発表の準備自体は入念にしたものの、そのテーマと結びつく諸問題の認識と、それについての自分の考えを少しは整理しておくべきであった。

そもそも自分の進路がまだほとんどなにも決まっていないが、今回の留学を経て、それまで漠然と自分の内に存在した、外国や外国人への恐怖のようなものが薄まったので、将来の自分の選択肢がさらに広まったと思う。